「農業振興・担い手専門委員会」活動報告

女性農業者のほ場見学会・情報交換会

青年就農者、山形大学農学部生と農業委員の交流会

農業振興・担い手専門委員会では、担い手育成の一環として、山形大学農学部学生との交流事業を行っていますが、4回目となる今年度は青年就農者を加え、10月19日に女性農業者のほ場2か所の見学と鶴岡市内第三学区コミュニティセンターで意見交換会を行いました。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

鶴岡市内を出発した2台のマイクロバスは、青年就農者6名、山形大学農学部学生16名と農業委員16名を乗せ、鶴岡市内から南へ向かう。今回は女性委員のほ場の見学と経営スタイルを聞く。

まず伊藤委員（熊出）のほ場で月山ワインの原料であるヤマソービニヨン畑とさくらんぼ園を見学した。そのほか庄内柿、水稲を栽培しているとのこと。経営のスタイルやそれぞれの気にかけて行っているところや苦労話などを伺った。

伊藤由紀子委員のぶどう畑

重松美鈴委員の柿畑

次に重松委員（西荒屋）のほ場を見学。重松委員はぶどう、庄内柿、桃、さくらんぼ、枝豆、浅葱と水稲を栽培とのことで、ちょうど白ワインの原料となる甲州の収穫中であった。また場所を替え柿畑で樹上脱渋の柿を試食させてもらいながら話を伺った。

お二人とも先代から受け継いだ果樹栽培を拡大、高度化している点が印象的だ。また青果は直売がメインとのことで、果樹栽培、直販で成功しているのは女性ならではの気遣いやていねいさがあってのことと見受けられた。巷には女性が経営に携わっている組織の方が売り上げの伸びが高いとのデータもあるようだ。

意見交換会

ほ場見学の後は会場を移し、3つの班に分かれて意見交換を行った。

まずは自己紹介で自分の農業に対する思いを話してもらったが、学生の中には将来、「就農」、「法人だったら農業への就職もあり。」や、「農家に嫁いでもいい。」という学生もいて、その後の意見交換では青年就農者も先輩農業者（委員）も熱く農業の魅力や農村の実態など、熱く語りあった。

また農産物の直接販売については、皆の関心も高く、多くの質問があった。六次産業化の推進が叫ばれている昨今だが、その問題や苦労を知ってもらうには学生には良い機会であったと思う。

その後、懇親の場もあり、さらに熱く語り合った半日であった。

（農業委員　木村　充）